

おもいだす

じてんしゃ かよ しょくば いま どうじしやくしょ つと ちち
自転車で通える職場など今ではまれだが、当時市役所に勤めていた父は、
じてんしゃ ふん ところ し じゅうたく あた まいにち とけい
自転車で15分ばかりの所に市の住宅を与えており、毎日まるで時計で
はか じはん かなら いえ かえ あつ
でも計ったように5時半には必ず家へ帰ってきた。どんなに暑くてもどん
なに寒くても、よほどのことがない限り、これは定年で退職するまで変わ
らなかつた。

ちち おも だ き れんそう ひる
父のことを思い出すと、決まって連想するにおいがある。昼のにおいであ
る。正確には夏の夕暮れのにおいとも呼ぶべきだが、私にとってその懐か
しいにおいは「昼のにおい」であった。

なつ ゆうぐ ちち あせ きたく あせ あに わたし
夏の夕暮れ、父は汗まみれになって帰宅すると、汗もふかずに兄と私を
おおごえ よ にわいじ ゆいいつ しゅみ ちち ゆうはん じかん あに わたし
大声で呼んだ。庭弄りが唯一の趣味だった父が、夕飯までの時間、兄と私
にわ よ てつだ
を庭へ呼んでその手伝いをさせるのである。「こことそこはこんなふうに、あ
そこは・・・」と父の言うままに、草を抜き、土を運んでいた私たちは、
はん い はは こえ みみ ちち きづ
「ご飯ができましたよ」と言う母の声を耳にするとホッとする。父に気付か
れないようにこっそりお互いの顔を見て、ニッコリうなずき合ったものであ
る。「じゃあ、最後に水をやって、それから手を洗って食事にしよう」その言葉
でようやく庭仕事から解放される。昼のにおいがするのは、そのときである。

ゆうすず はなび きげん ひ ちち い
「夕涼みがてら、花火でもしょうか」機嫌のいい日の父は、そう言って、

わたし にわ つ だ なかよ にわしごと てつだ こども
私 たちを庭へ連れ出した。あるいは仲良く庭仕事を手伝った子供たちへのご

ほうび はなび せんこうはなび
褒美のつもりだったかもしれない。もっとも、花火といっても線香花火であ

とうじ いま そらたか あ う あ はなび とお
る。当時のことだから、今のように空高く上がる打ち上げ花火や、通りがか

ひと おどろ おお おと だ
りの人を驚かせるほどの大きな音を出すものはない。それでも、やけどを

い ひ ちち やくめ き い
するといけないからと言って、火をつけるのは父の役目だった。お気に入り

ゆかた き いす こしか うちわ つか ゆうすず
の浴衣を着て、ゆったりと椅子に腰掛け、団扇を使いながら夕涼みしている

ちち ところ いっぼんいっぼんはなび も い ひ はは
父の所へ、一本一本花火を持って行き、火をつけてもらう。それを、母が

じゅんび みず はい ところ はこ い あに わたし
準備してくれた水の入ったバケツの所までそっと運んで行って、兄と私

なが ひ はな さ きょうそう
は、どちらが長く火の花が咲かせられるか競争するのである。

さいご ちち い ひ いっぼん き
「これが、最後」父がそう言って火をつけてくれた一本が消えてしまうと、

ひ たま み め いっしゅん くらやみ
それまで火の玉をじっと見つめていた目には、一瞬あたりが暗闇になって

しゅんかん ひる いちど こんど すこ さび
しまう。この瞬間、昼のにおいがもう一度する。今度は少し寂しいにおい

こども じかん お
である。子供の時間が終わるにおいである。

ちち な じゅうねんあま おお こえ あ たの
父が亡くなって十年余り。ベランダで大きな声を上げて、楽しそうに

はなび こども すがた なが なつ ひる
花火をしている子供たちの姿を眺めつつ、懐かしい昼のにおいとともに

きょう ちち おも だ
今日も父のことを思い出している。